

## 目 次

まえがき ..... iii

## 第1部 コーパスに基づく日本語のモダリティ研究

## 第1章

日常会話コーパスを活用した丁寧さ・対人モダリティの生起要因と  
その実態の解明 ..... 小磯花絵 3

## 第2章

書き言葉コーパスに見られる「でもない」の用法  
—頻度とコロケーションを考慮した文法記述— ..... 中俣尚己 21

## 第3章

諸方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション  
—推量表現の地域差— ..... 木部暢子 41

## 第4章

通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷 ..... 小木曾智信 63

## 第5章

学習者コーパスを活用したモダリティ研究  
—日本語学習者の「かなと思う」の発達—  
..... 迫田久美子・佐々木藍子・細井陽子・須賀和香子 83

## 第6章

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する

モダリティアノテーションとその分析.....松吉俊・浅原正幸 103

## 第2部 多角的な視点から見た日本語のモダリティ研究

---

## 第7章

モダリティとイントネーション.....窪菌晴夫 125

## 第8章

条件付き命令・依頼文

—日本語条件文のモダリティ制約再考—.....有田節子 143

## 第9章

名詞修飾表現から見たモダリティ.....益岡隆志 163

## 第10章

主題・とりたて表現とモダリティの呼応

—日本語とスペイン語の対照研究—.....野田尚史 179

## 第11章

脳科学から見たモダリティ

—コーパスと事象関連電位計測から見た証拠性とモダリティの意味的差異—

.....原由理枝 199

編者・執筆者紹介.....219

## まえがき

本書は、多様な言語データに基づいて多角的・総合的な観点から日本語のモダリティ研究を開拓しようとする論文集である。

本書は2部構成になっている。第1部の「コーパスに基づく日本語のモダリティ研究」は、日常会話コーパス、諸方言コーパス、通時コーパス、学習者コーパスなど、さまざまなコーパスデータに基づいて、それぞれの日本語に見られるモダリティの様相を明らかにするものである。

第2部の「多角的な視点から見た日本語のモダリティ研究」は、文法の視点の他、音声、対照研究、脳科学など、さまざまな視点から日本語のモダリティの様相を明らかにするものである。

本書のもとになったのは、2018年12月15日・16日に東京証券会館で行われたNINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」の2つのワークショップである。

国立国語研究所（以下、国語研）は2016年4月～2022年3月の第3期中期計画において、「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という共同研究プロジェクトを行っている。このプロジェクトは(1)～(6)の6つのサブ・プロジェクトと、(7)のコーパス開発センターが行っているコーパス間の串刺し検索の開発を含む。

- (1) 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
- (2) 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究
- (3) 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成
- (4) 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開
- (5) 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究
- (6) 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明
- (7) コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究

第3期の国語研の研究においてはこれらの7つのプロジェクトが独立して研究するのではなく、複数のプロジェクトにまたがる領域横断の研究、さらに進んで領域の総合・統合を目指すことが企図されている。そのため、複

数のプロジェクトにまたがってシンポジウムやワークショップ等を行い、さらにすべてのプロジェクトが関わるシンポジウムを第3期期間中に2回行うことを決めた。本書のもとになったシンポジウムはその第1回のものである。

シンポジウムの企画は月1回の共同研究プロジェクト推進会議で議論され、すべてのサブ・プロジェクトのメンバーがなんらかの形で参加し、貢献できるテーマとして「データに基づく日本語のモダリティ研究」を設定した。すべての言語研究はなんらかの形で「データに基づく」ものであるわけだが、ここでは理論研究ではなく実証研究であり、国語研が作成しているコーパスなどのいわゆる言語資源を活用したもの、あるいは、実験データに基づくものという意味で用いている。

シンポジウムでは、1日目にカリフォルニア大学サンディエゴ校の Rafael Núñez 氏の招待講演の後、国語研第3期の6つのプロジェクトの紹介がなされた。2日目の午前はワークショップ「コーパスとモダリティ」が行われ、午後は、ポスター発表の後、ワークショップ「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」が行われた。シンポジウムの詳しい内容は国語研のウェブサイトでご確認いただきたい。「データに基づく日本語研究」で検索すれば、簡単に見つかるはずである。

本書を編集するに当たり、本書の内容をモダリティ全般をカバーできるようにするために、2つのワークショップでの9件の発表に加え、有田節子、中俣尚己の両氏にも寄稿をお願いした。両氏の参加により本書全体に統一感を出すことができたと思われる。両氏に感謝したい。

提出された原稿は編者である田窪と野田が読んで著者にコメントを返し、必要な改稿をしてもらった。国語研 PD フェローの7名にも書き方の統一性や読みやすさなどをチェックしてもらった。原稿のチェックを担当してもらった平田秀、井戸美里、鈴木彩香、大島一、松崎安子、居關友里子、蒙韞、宮部真由美の各氏に感謝する。

本書の出版によって、データに基づく日本語研究・言語研究がこれまで以上に多様な形で展開されるようになることを編者・著者一同が願っている。

(田窪行則・野田尚史)

## 第1部

# コーパスに基づく 日本語のモダリティ研究

---

## 第 1 章

---

# 日常会話コーパスを活用した丁寧さ・対人モダリティの生起要因とその実態の解明

小磯花絵

### 1. はじめに

私たちは日常生活の中で聞き手との関係性や場面に応じて言葉を多彩に使い分けている。種々のモダリティの中でも丁寧さのモダリティや対人のモダリティは特にこうした使い分けの影響が強く見られることから、これまで多くの研究が行われてきた。その一つが、丁寧さ・対人のモダリティの選択などにより規定されるスピーチレベルに関する研究であり、レベルの選択や切り替え（シフト）に関わる言語的、社会的、心理的な要因やその効果などを明らかにする研究が行われてきた（宇佐美 1995, 三牧 2002, 野田 2003, 伊集院 2004 など）。

こうした研究では、日常生活で交わされるリアルな会話ではなく、ドラマなどのシナリオやテレビなどの対談、ロールプレイ、実験環境下での自由会話などが分析の対象とされることが多かった。これは、聞き手との社会的・年齢的な上下関係や親疎などの心理的要因、場の改まり度などの社会的要因といったように、多様な変数がレベルの選択に複雑にからみ合うために、検討する要因を絞り込みその他の条件を統制する必要があるためである。また話者間の関係性の把握や統制のために 2 人会話が対象とされることが多く、

## 第2章

---

# 書き言葉コーパスに見られる 「てもいい」の用法

## —頻度とコロケーションを考慮した文法記述—

中俣尚己

### 1. はじめに

この論文ではモダリティ形式の1つである「てもいい」の様々な用法を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）における事例に基づいて整理、記述することを目的とする。「てもいい」が様々な用法を持つことは先行研究ですでに指摘されており、特に日本語教育の文脈でどのように導入、指導すればよいかということが議論の焦点となってきた。しかしながら、複数の用法のうちどれが多く使われるのか（頻度）、また、それぞれの用法はどのような出来事に対して使われるのか（コロケーション）といったことについては、データに基づいて論じられてきたわけではない。

本研究ではBCCWJに出現した6,000以上の「てもいい」の用例すべてに目を通し、ボトムアップ的に全用例をカバーできるような用法の体系化を試みた。その上で、頻度とコロケーションも加味し、日本語教育に役立つ記述を行った。

以下はこの論文の構成である。2.で先行研究における「てもいい」の記述を整理する。3.で調査方法について述べ、4.で本研究での用法の分類について述べる。5.では調査結果を概観し、用法間の頻度の偏りについて述

## 第3章

---

# 諸方言コーパスに見る モダリティ形式のバリエーション —推量表現の地域差—

木部暢子

### 1. はじめに

方言研究に限らず言語研究にとって、コーパスはデータに基づく研究の基礎データである。現代日本語や古典語に関しては、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や『日本語話し言葉コーパス』、『日本語歴史コーパス』などのコーパスが公開され、研究に活用されているが、方言に関しては、これまで大規模なコーパスが存在しなかった。そこで、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記述とドキュメンテーションの作成」(略称「危機言語・方言プロジェクト」)では、諸方言を横断的に検索することができる『日本語諸方言コーパス (COJADS)』の構築を開始し、2019年3月に24時間の自然談話データよりなるCOJADSモニター版を完成させた。本章では、COJADSモニター版を活用した諸方言のモダリティ形式の研究成果を報告する。

### 2. 『日本語諸方言コーパス (COJADS)』について

日本の方言研究は、これまで各地の言語記述や言語地理学の面で大きな成果をあげてきた。言語地理学の代表的な成果として、国立国語研究所編



## 第4章

---

# 通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷

小木曾智信

### 1. はじめに

『日本語歴史コーパス』(CHJ)の構築が進み、未だ不十分な点は残るものの、上代(奈良時代)から近代(明治・大正)まで一通りの時代をカバーできるようになった。本稿は、このコーパスから得られるデータに基づいて、モダリティを表す主要な形式がどのように使われてきたのか通時的に概観しようというものである。モダリティの議論としては大きく不足する点があることは承知のうえで、個々の用例や形式の意味・用法には踏み込まず、各形式の頻度の推移を観察し、そこにモダリティを表現するあり方の大きな変化を確認する。その結果として現れる中世以降の文語文におけるモダリティ形式の質的な変化にふれる。

### 2. 調査の対象

#### 2.1 対象としたモダリティ形式

モダリティ表現の形式は時代ごとに大きく異なるし、モダリティという語が意味するところの幅広さに応じて表現の形式もあり方も極めて多様であって、網羅的な調査はもとより望むべくもない。そこで、本稿ではあらかじめ

## 第5章

# 学習者コーパスを活用したモダリティ研究

## —日本語学習者の「かなと思う」の発達—

迫田久美子・佐々木藍子・細井陽子・須賀和香子

### 1. はじめに

日本語母語話者と日本語学習者の言語使用には、さまざまな部分において相違点がある。日本語母語話者には見られない学習者特有の発音や文法的な誤用は、学習者が使用する日本語の一側面である。一方、日本語母語話者は使用するが、学習者には習得が困難であり使用されない言語形式もある。例えば、日本語のモダリティ表現の「ようだ」「らしい」「かもしれない」「だろう」などは学習項目として教材に取り上げられていても、習得は難しいとされている(大島 1993, 佐々木・川口 1994, 菊池ほか 1997, 伊集院・高橋 2004, 黒滝 2016)。

筆者らは、学習者と日本語母語話者を対象として行ったロールプレイの調査での両者の発話を比較したところ、日本語母語話者が用いるある表現が学習者にはほとんど使用されなかったことに気づいた。それは、「かなと思う」というモダリティ表現である。本研究で用いたロールプレイは、アルバイトの日数の変更を店長に依頼する内容で、被調査者はアルバイト生になって店長役の調査者と対話する。その場面で、日本語母語話者は(1)や(2)のように、「かなと思う」を使用している場面において、学習者は(3)や(4)の

## 第6章

---

# 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対するモダリティアノテーションとその分析

松吉俊・浅原正幸

### 1. はじめに

国立国語研究所の中央資料庫には大量の用例カードが収蔵されている。かつては実例を書籍・雑誌・新聞から採取し、用例カードとして整理したうえで、注釈付けをおこない、データに基づく定量的な言語研究がすすめられていた。現在、用例は電子的に集積されるようになり、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下 BCCWJ)をはじめとして、用例カードはコーパスという形で公開され、共有されるようになった。注釈は共有されたコーパス上に電子的に付けられ、定量的な分析だけでなく、検証の再現性が担保できるようになった。用例カードはコーパスという形で共有され、言語研究のオープンサイエンス化がすすめられている。

テキストコーパスの場合、語・句・節・文などの範囲を選択し、言語の特徴を表すラベルや指標を記号化して注釈付けする。このような注釈付けのことを「アノテーション」と呼ぶ。海外では言語横断的なアノテーション基準の研究が展開されている一方で、国内では再現性のない恣意的な個別事例研究に終始している実態がある。データに基づく言語研究においては、再現性を担保し、恣意性を排除するために、アノテーションデータの共有が求めら

## 第2部

# 多角的な視点から見た 日本語のモダリティ研究

---

## 第7章

# モダリティとイントネーション

窪菌晴夫

### 1. はじめに

「…だろう」「…(である)はずだ」「…(である)はずはない」などの文法表現は、話している内容に対する話し手の判断や感じ方を表すモダリティ表現とされているが、モダリティを表すのはこのような文法表現だけではない(モダリティに関する文法研究については益岡 1991, 2007, 赤塚・坪本 1998 他を参照)。音声の世界では、イントネーション(文音調、文レベルでのピッチの変動)がしばしば文法的なモダリティ表現と同じ機能を果たす。つまり、イントネーションがモダリティの音声形式として働く。

たとえば「行きますか?」という疑問文を例にとると、(1a)のように文末の「か」を高く発音すると、イエスカノーかを求める中立的な疑問文になるが、(1b)のように低く発音すれば「そろそろ行きましょう」という誘いの意味になり、そこには「もう行く時間です」という話し手の判断が含意されるようになる。さらに(1c)のように「か」を下降上昇調で発音すると、「出発するにはまだ早い」といった話し手の判断が含意され、「本当に行くのか」という聞き手の意思を確認する意味になる。いずれのイントネーションにも、「自分たちが／聞き手が行く」という命題に対して疑問の意味を付け加えるだ

## 第8章

# 条件付き命令・依頼文

## —日本語条件文のモダリティ制約再考—

有田節子

### 1. はじめに—日本語条件文の「モダリティ制約」—

日本語には英語の if に相当する基本的な条件形式が複数あり、その形式間の使い分けが日本語教育のための文法書や日本語文法の記述的研究でしばしば取り上げられる（蓮沼・有田・前田 2001 など参照）。その際、条件形式によって主節（後件）の「モダリティ」に制約があることが議論になり、中でも、基本条件形 *-reba*（以後「バ」）には、タ系条件形 *-tara*（以後「タラ」）や条件接続助詞 *=nara*（以後「ナラ」）とは違って、以下のような複雑なモダリティ制約があると言われている。

バ文は、前件が後件と同一の主語で非状態性述語をとる場合に、後件に行為要求の表現が出現しにくい。（「山田さんに {会えば／会ったら} 私に電話するように伝えてください。」「時間が {あれば／あったら} 電話してください。」）

ただ、文法性判断には揺れがあることもしばしば指摘されている。例えば堀（2004）は、「前件が状態性述語や無意志動詞・自動詞で、人と関わりなくある状況になることを表す場合は、（中略）相手への弱い働きかけが許容される」（堀 2004: 124）としている。ソルヴァン・前田（2005）は、「Pな

## 第9章

# 名詞修飾表現から見たモダリティ

益岡隆志

### 1. はじめに

文法カテゴリーの規定は多くの場合、研究者のあいだで合意を得ることは困難であり、とりわけ「モダリティ」というカテゴリーをめぐるには様々な見方が提示されている。そのなかで、モダリティに対する筆者の見方は文構成のなかにモダリティを位置づける「構成的モダリティ」とでも呼び得る見方である。文構成のなかにモダリティを位置づけるとは、文を、事態を表す部分と話し手の態度を表す部分で構成されるとしたうえで、前者を「命題」、後者を「モダリティ」と呼び分けるものである。この見方は、益岡（1987, 2007）などで述べたとおり、文を「コト」と「ムード」により構成されるとする三上（1959）の見方や“proposition”と“modality”により構成されるとする Fillmore（1968）の見方を受け継ぐものである。寺村（1982）、仁田（1991）、中右（1994）なども同様の見方に立っている。

文は命題とモダリティにより構成されるという点を、(1)の例を用いて見ておこう。

(1) ねえ、どうやら昨夜激しく雪が降ったようだよ。

この文は次の(2)に示したように、「昨夜激しく雪が降った」という事態を

## 第 10 章

# 主題・とりたて表現とモダリティの呼応

## —日本語とスペイン語の対照研究—

野田尚史

### 1. この論文の目的と構成

この論文の目的は、主題・とりたて表現が述語のモダリティとどのように呼応するのかを整理し、呼応が起きる理由を考察することである。

研究の対象は日本語を中心にするが、スペイン語とも対照する。その対照によって、主題・とりたて表現とモダリティの呼応について日本語とスペイン語の共通点と相違点を検討する。

主題・とりたて表現とモダリティの呼応というのは、次のようなことである。たとえば、日本語のとりたて表現「でも」は、(1) a. では「肉だけに限らず肉に似たものを含める」という意味を表す。このような非限定の意味を表す「でも」は (1) a. のように勧誘を表すモダリティをもつ述語「食べるか」とは呼応するが、(1) b. のように過去の事実を表すモダリティをもつ述語「食べた」とは呼応しない。

(1) a. 「肉でも、食べるか」青茲が言う。 (『真鶴』 p. 174)

b. #「肉でも、食べた」青茲が言う。

このように、主題・とりたて表現の中には、特定のモダリティをもつ述語と呼応するものがある。



## 第 11 章

---

# 脳科学から見たモダリティ

## —コーパスと事象関連電位計測から見た証拠性とモダリティの意味的差異—

原由理枝

### 1. はじめに

日本語学において、モダリティの定義は広く、「命題内容に対する話者の判断や感じ方を表す言語表現」とされる。一方、Kratzer (1981) に代表される形式意味論においては、可能世界の集合に対する量化として定義されるので、英語の *must* や *may* などに代表される、認識モダリティや義務モダリティなどに限られる。また、モダリティとかかわりの深い言語範疇に証拠性 (Evidentiality) がある。日本語には、ダロウ、ハズダ、ニチガイナイ、カモシレナイなど、形式意味論でいわれる狭義のモダリティの範疇に相当する助動詞のほかに、ヨウダ、ミタイダ、ラシイのような、証拠性の範疇に含められる助動詞も豊富にある。日本語の文献では、細かな用語の違いはあるが、後者を証拠性モダリティに分類し、モダリティの一種として数えている。形式意味論の分野においても、証拠性をモダリティの一種としてとらえるか、別個の独立した範疇とするか考察する議論がある (Davis and Hara 2014)。なかでも、Davis and Hara (2014)、Hara (2017)、Hara et al. (2018) は、日本語のヨウダは、形式意味論における狭義のモダリティとは別の範疇であると主張した。本章では、Hara et al. (2019a, b) の研究をもとに、コーパスおよび